
英雄は静かに眠る

aaa_rabit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄は静かに眠る

【Nコード】

N16310

【作者名】

aaarabbit

【あらすじ】

英雄と呼ばれた少女がいた。少女はある日突然、姿を消した。あれから三十年。従者はようやく辿り着く。

そこは王都から五日ほど馬車を走らせた山間の小さな村だった。外部の人間など滅多にやってくることもなく、二頭立ての馬車は明らかに不釣り合いだった。井戸端会議をしていた女達も、畑を耕していた男達も珍しげに見ている。

やがて村を抜け、ぽつりぽつりと石が建てられている草原に出た。盛りなのだろう、白い可憐なアムの花が絨毯の様に広がっている。御者に待つよう告げて男は一人、歩き出した。山間を抜ける風が、男の持つホワクの花束を揺らす。一つ一つ、石に彫られた名前を確認していく。やがて男はやや離れた場所にホワクの花が彫られた白い石を見つけた。文字を指先で辿って、確かめる。それは墓だった。

”ルナ・バークスここに眠る”

「やっと見つけました、ルーナ様」

皺が目立つ様になった顔を歪め、男は目を細めた。かつて彼女が好きだったホワクの花を捧げ、節くれ立った手で墓を一撫でする。「貴方が去ってから三十年、あの国は変わりました。陛下が積極的に受け入れたお陰で、同化政策は順調に進んでおります。貴方と同じ様な境遇の者が笑って暮らせるように私も頑張りました。貴方にも一度目にして頂きたかった。ねえ、ルーナ様。貴方は幸せでしたか？」

英雄となった娘は、ある日突然一人で姿を消した。父と、兄と慕っていた乳兄弟すらも置いて。

姿を消す前の晩、月夜に照らされた静かな眼差しは、今も男の中

で褪せることなく根付いている。旅の間に少しずつ取り戻していった感情は英雄となったことで、忘れたようだった。凧いだ湖面の如き瞳は哀しみすらも凍らせ、最後に受けた呪いがなければそのまま朽ち果てたに違いない。何の意図があつてそうしたのかは判らない。ただ、それが結果として彼女を生かしたことだけだ。本人が望まなにも拘わらず。今となつては全てが闇の向こうだ。

感傷に耽つていた男は、草を踏む音で顔を上げた。歩いてきたのは15、6くらいの若者だ。彼を見た瞬間、男の中で疑問が氷解した。若者もこちらに気づいたようで、金の瞳を丸くしている。その手には咲き初めのホワクが抱えられ、同じ墓へ参つたのだと気づく。男は場所を譲り、若者が祈りを終えるのを待った。黒髪に所々混じるのは白髪かと思つたが、よく見ればそれは光が透き通るような銀髪だった。束の間、風が葉を擦る音だけが耳を支配する。

ゆっくり目を開けた若者は立ち上がつて膝の埃を落とすと、男に向き直つた。

「やつと思ひ出しました。」レンさん”でしょ？生前母さんが良く貴方のことを話してくれました」

「ああ、やはり。君はルーナ様のご子息ですか。顔立ちがよく似ておいでだ」

「あの。よければ家に寄つていつてくれませんか？昔の母さんのこととか色々聞きたいし」

「丁度良かった。私の方こそ、一度お邪魔しようと思つていたところ。迷惑でなければお願いできますか？」

「全然。あ、俺リアンです。リアン・バークス」

「リアン様、ですね。改めて私はレンフォード・フィアン・レアードといいます」

「様なんて止して下さいよ。普通に名前でもいいです。俺はレンフォードさん、様？みたいに貴族でも何でもないただの平民ですし。様

付けられるような憶えはありません」

ぶんぶん首を横に振る若者に男は苦笑した。

「ではリアン。私のこともレンとお呼びください」

「え、でも」

「ここにいる私はただのレンフォードですから」

渋々判つたと了承する若者。またも共通点を見いだして、暖かな眼差しを注いでいることに気づかず、若者は歩き出した。

小さな家だつた。かつて二人が暮らしていた所よりも更に小さい足を踏み入れれば、小さいながらもよく手入れされていることが判つた。こちらに気づいたのか、小柄な少女が中から顔を出す。栗色の髪に栗色の瞳と凡庸であつたが、愛らしい顔立ちをしていた。

「お帰り兄さん。そつちはお客さん？」

「ただいまファナ。お茶を淹れてくれるか？この人は母さんが言つてた”レンさん”。父さんとジュディは？」

「貴方があの？」

あのに続く意味深な言葉に、レンフォードは顔には出さないが内心盛大に首を傾げていた。一体何と説明されていたのだろうか。

「お嬢様、ファナ姫もルーナ様の娘さんですか？」

「ひ、姫！？やだ、そんな。ファナでいいです！兄さん、私父さんとジュディ呼んでくるから」

顔を赤くした少女が、おさげを靡かせて家を出て行く。余程恥ず

かしかつたらしい。転ぶなよーと声をかけてからリアンは、居間へ促した。

「すみません、騒々しくて。今お茶を淹れますね」

「でしたら私も」

「レンさんはお客様ですから座っていてください。直ぐに父と妹たちも帰ってきますし」

そう言つて厨房へと姿が消えるのを待つて、レンフォードは肩の力を抜いた。手作りなのだろう、素朴なクッションや小物が至る所に置かれている。ここが最後に彼女が暮らしていた家なのだ。まだ二人しか会っていないが、子供たちを見れば暖かい家庭だったのだろうと判る。そうであつて欲しいと願わずにはいられない。感慨深く見回していたレンフォードだが、暖炉の上に置かれた物を発見して目を見開いた。まさかと思ひながら手に取れば、それは確信に変わる。繊細な装飾の施された二対の短剣に、色褪せてボロボロになった小さな兎のぬいぐるみ。縫い目は粗くお世辞ながらも可愛いとは言えない代物であつた。

「それは妻の遺品から出てきました」

元の場所に戻したレンフォードはゆっくりと振り返つた。同じ歳くらいの柔和な微笑みを宿した男が立つていた。いかにも気の良さそうな男である。差し出された手にレンフォードは握りかえた。

「貴方とお会いできて良かった。ジャンロック・バークスです」

「それはこちらの台詞だ、ジャンロック殿。レンフォード・フィアン・レアードです。どうぞレンとお呼びください。その方が慣れているでしょう？」

「息子達が失礼をしたようだ。ではお言葉に甘えてレン殿と呼ばせ

ていただきますよ」

向かい合って座った二人の前に、湯気を立てたカップが運ばれてくる。それを運んできたのは、真っ直ぐ伸びた銀の髪につぶらな茶色の瞳をした小さな少女だった。少女はレンフォードと目が合うと、恥ずかしげにリアンの後ろに隠れてしまう。腰に腕を回した少女を片手で押し出し、挨拶しろと小声で窘める。

「あの、初めまして。ジュディです」

おずおずと頭を下げ、またリアンの後ろに隠れてしまった。眉尻を下げながらリアンがレンフォードに謝り、手に持っていた器を置いた。

「リアン。ファナはどうした？」

「馬の様子を見に行ってるよ。レンさんもビックさんも今日は泊まってくだろ？」

「いえ、そこまでお世話になる気は……」

「この村に宿屋はありませんし、宿のある隣村に行くにも着くには夜遅くなるでしょう。妻の家族を危険に合わせる訳にはいきませんから。狭いですが、部屋がありますから遠慮なさらず」

「すみません。お世話になりっぱなしで」

「お気になさらないください。こんな辺境だ、誰かが訪ねてきてくれるだけで嬉しいんですよ」

「兄さん、終わったわよ。御者の人はマリー叔母さん達に連れてかれちゃった」

一仕事したのだろう。まくった袖を戻しながらファナが来た。子供たちは適当なところへ座る。お茶の甘い芳香が部屋を満たした。心地良い沈黙は、カップを置いたレンフォードに遮られる。

「……ルーナ様は笑っていましたか？」

王宮の外れに隔離された小さな塔で育った彼女は、年を経る事に感情を表に出すことが無くなった。どれだけレンフォードが隠そうとも、人々の悪意から守ることは出来なかった。血の繋がった叔父や従兄弟にすら存在を忌まれ、彼女の世界はどれだけ息苦しかっただろう。どれだけ己の幼さを呪ったことか。

魔王討伐という旅に出て、初めて彼女は外に出た。様々な出会いは彼女を変え、生きることを見いだし、そして。

「母さんは笑ってたよ。最後まで笑って逝った。我が人生悔い無しだ、って」

旅の仲間だった傭兵がよく口にした言葉だ。職業故か、その傭兵はいつも死に際にそうりたいと話していた。

「そう、ですか……。つ。良かった！」

肩を震わせながら泣くレンフォードを誰もからかったりしなかった。絞り出された万感の想いが、どれだけ故人を思っていたのか判る。小さな少女から差し出された布が、大粒の涙を吸った。

「落ち着きましたか？」

「かたじけない。取り乱してしまいました」

「いえ。それ程までに妻を思いやってくれてありがとうございます」

「こちらこそルーナ様を幸せにしてくださいありがとうございます」

互いがぺこぺこ頭を下げ合う姿に、子供たちは呆れていたが何も言わなかった。席について落ち着いたところでレンフォードが照れたように切り出す。

「ところで、もしジャンロック殿さえ良ければその、馴れ初めなどを聞かせていただませんか？お恥ずかしながら、三十年前のルーナ様しか私は知らないのです」

「それは勿論。ですが、本当によろしいのでしょうか？」

「陛下は真実を明らかにしたいのです。私達が犯した過ちを忘れないために」

「そうですね。手紙を貰ってまさかとは思いましたが」

初めて会った彼女は死にたがっていた。死ねないのだと右腕をさすりながら教えてくれたのを憶えている。それは彼女さえも知らなかった小さな命を守るため。事実を知った彼女は、泣いて名前を呼んでいた。リオンと。

「判りました。私の知る限りをお教えしましょう」

そして語り出す。人知れず姿を消した英雄のその後を。

昔々、小さな国にとても美しい王女さまがおりました。

その姿を見た魔王様は、小さな国を侵略しない代わりに王女さまを要求しました。

王女さまは王様が愛した後のたった一人の子供だったのです。

王様は泣く泣くその条件を受け入れ、王女さまは魔王様の元へ嫁いでいきました。

やがて時は流れ、ある時王女さまは小さな赤ちゃんを連れて国へ

戻ってきました。

赤ちゃんは魔王様と王女さまの子供でした。

王様は代替わりしており、王女さまの父ではなく母の違う兄になっ
ていました。

兄王は激怒しました。当然です。国を守るために捧げた王女が戻
ってきたのですから。

兄王は王女さまに耳を貸さず、王女さまを小さな塔に閉じこめて
しまいました。

王女さまは嘆き悲しみ、そのまま死んでしまいました。

残された赤ん坊を世話するのは、王女さまの世話をしていた侍女
の家族でした。皆、魔王様の子供を恐れたのです。

人間と魔族の子供。赤ん坊は成長し、母とそっくりの美しい少女
に成長しました。

その頃、魔族による侵略は日に日に拡大していました。魔族は人
間よりも遙かに強靱な一族だったのです。数多の大国が呑みこまれ、
小さな国にも燃え移らんとしていました。

苦渋に迫られた兄王は、自分が追いやった姪の存在を思い出しま
した。魔族の血を引く王女さまの子供は、普通の人間が振るう何倍
もの重さのある剣を軽々扱う事が出来たのです。

兄王は命令しました。魔王を討つように、と。

お姫様は国を守るために旅に出ました。最初は従者だけで。やが
て、お姫様の噂を聞いた猛者達が集まってきました。その中に魔王
様はいました。誰も知りませんでした。王女さまは二人の子供を
産んでいたのです。魔王の血を強く引く男の子は魔王の元に置いて、
王女さまの血を強く引いた女の子だけを連れて国に戻ったのです。
やがて、成長した男の子は父の跡を継いで魔王となっていました。

最初は単なる興味だったのです。これまで王の命令を受けて魔王
を討つ旅に出た者は沢山いましたが、魔王城に辿り着いた者は一人
もいません。同じ魔王の血を引く妹ならばもしかすると。暇を持て

余っていた魔王様にとって、それは遊びでした。

しかし旅を共にする内に、二人は強く惹かれ合っていました。けれどそれは許されぬ恋。

やがて魔王城に辿り着いたお姫様を待っていたのは、愛した男の姿でした。お姫様は初めて魔王だと知ったのです。それは長い戦いでした。力尽きた仲間達を庇いながらお姫様は果敢に戦いました。一日が経ち、母から受け継いだ短剣で魔王に止めを刺しました。そのまま自分も死のうとしていたお姫様でしたが、最後の力を振り絞った魔王の残した右腕の呪いが死なせてはくれませんでした。

長き魔族との戦いに終止符を打ったお姫様は英雄として迎えられました。人々はお姫様を讃え、王もお姫様を温かく迎えました。

けれど。人々の歓びとは反対にお姫様は失意の中で過ごしていました。愛する人を自分の手で屠った苦しみ。それが血の繋がった双子の兄だったこと。

死に場所を求め、お姫様は一人で城を出ました。当て所無く旅をしていたお姫様は、とある村に雇われて山賊退治に出ていました。

相手は剣の達人です。あつという間に壊滅したお姫様でしたが、力尽きてそのまま倒れてしまいました。

偶々通りがかった商人がお姫様を介抱しなければ、望み通り死んでいたでしょうか。

死に損ねたお姫様に医者から告げられたのは、お姫様に宿った小さな命でした。そして、魔王が残した最後の呪いの意味を悟ったのです。

お姫様は今度こそ生きるために、旅を始めました。途中で素敵な出会いをして、結婚して。

三人の子供と旦那さんに囲まれながら幸せに逝きました。

「最後はかなり適当だな」

「惚氣話を聞かされた私の身になってください」

「彼等は本当に良いのか？本来ならば彼が正統な継承者だ」

とんと肘掛けを指で叩く王子に初老の男、レンフォードは苦笑した。彼の大切な娘が残した子供こそが、典範によれば直系になるからだ。誰よりも濃い王家の血筋を持つことになる。何も知らなかった彼に、レンフォードは全てを話した。

「今更そんなものは必要ないそうです。自分は王の器ではないと、一度従兄弟として会いたいただけ」

「王位がそんなものと申すか」

望めば富も権力も正統に受け継ぐ権利があるのに。どうやら聡明な王子は、その答えが気に入ったようだ。

新しい時代が開かれる。彼等の行く先に幸多からんことを。

（後書き）

突発的に書きたくなった、ややシリアス後ハッピーエンドもの。最後の締めが、どうも中途半端になってしまった気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631o/>

英雄は静かに眠る

2010年10月11日13時50分発行